失われた楽園を求めて

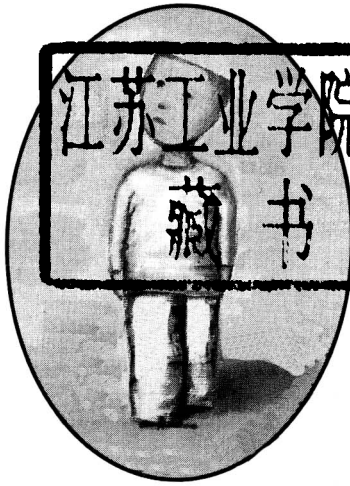
The Great Longing by Marcel Möring

マルセル・メーリンク

亀井よし子 訳

失われた楽園を求めて

マルセル・メーリンク　亀井よし子 訳



江苏工业学院图书馆
藏书章

ソニー・マガジンズ

失われた楽園を求めて

1997年2月25日　初版第1刷発行

著者—マルセル・メーリンク
訳者—亀井よし子
発行人—吾郷輝樹
発行所—株式会社ソニー・マガジンズ
〒102 東京都千代田区五番町6-2
電話 03-3234-5811
印刷所—中央精版印刷株式会社

©1997 Sony Magazines Inc.
ISBN4-7897-1109-9
Printed in Japan

乱丁、落丁本はお取り替えいたします。

秋の日

主よ、いまや時はいたりました。大きな夏は去りました
さあ、日時計にあなたの影を重ねてください
そして、草地に自由な風を吹かせてください

木の実たちに枝や蔓で熟れるようお命じください
願わくば、彼らにあと二、三日の透明な日々をお与えください
そのうえで、充足を促し、究極の甘さを
すばらしき美酒に変えよとお命じください

いま住まいを持たぬ者は、持たぬままに終わるでしょう
いま孤独な者は、永遠に孤独でしょう
孤独な者は、夜を徹して腰を下ろし、読み、かつ長い文をしたためるでしょう
そして、広い通りをさまようでしょう、行きつ戻りつ
落ち着きなく、枯れ葉が風に吹かれるなかを

「ライナー・マリーア・リルケ詩選集」より

あたし、何もかも憶えてるのよ　7
忘れなきゃだめよ　19
ことはどうはじまったのか　59
夜の蠅、ユリウス　103
明らかに、ぼくらは愛について何ひとつわかっちゃいない　127
もう過ぎたことよ　145
混沌たる環境の中での論理的経過　179

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

頭の中では、現実の人生はつねにどこかほかにある　207
砂漠をつくり上げる砂の一粒　225
記憶のけもの　237
はるか昔の感覚　247
すべてを忘れた男　269
ぼくらはこれからどこへ行くのだろう　285
訳者あとがき　291

失われた楽園を求めて

あたし、何もかも憶えてるのよ

「暑い夏だった。二十世紀でいちばん暑い夏だったわ。一九五七年。ママは地下室に坐ってた。キュウリのピクルスや、サヤインゲンの瓶詰め、ザワークラウトの樽やジンジャー・ビールの瓶、空っぽのジャガイモ袋、チューリップの球根の入った箱やなんかの並んだ棚、その棚に囲まれて坐ってるママのおなかは、地球そのものみたいに大きかった。あんな大きなおなかをした人なんて、それまでにひとりもいなかった。あたしたちが蹴っとばすたんびに、ママのドレスの下で誰かが人形芝居でもしてるみたいな感じになった。パパは論文を書いて、ソ連初の人工衛星(スプートニク)が打ち上げられて、おじいちゃんは癌にかかってたけどまだそれを知らなくて、おばあちゃんが死ぬのはそれから五年後の、ジョン・グレンが地球のまわりを回ってるときのこと。一九五七年。八月。人類史上、いちばん暑い八月だった」

「これから話すのはあたしたちについてのあたしの記憶よ」とリサがいった。「あたしたちというのは、あなたとラフとあたし。三人はいま家に帰るところなの。暑い午後で、遠くで誰かが水路の土手の草を焼き払ってる。三人で家への道を歩きながら、あたしはこんなことを考えてるの、こういうと

きは二度と戻ってこないだろうな、って。三人で歩きながら、あたしは考えるの、こんなときは二度と戻ってこないだろうな、って。あたしの目に、緑の道にぽつんと三つ、鮮やかな色の点になったあたしたちの姿が見えるわ。これはあたしの記憶。だけど、いまあたしの頭には、そのずっとあとに起きたことも浮かんでる。同じ坂道のてっぺんのオークの木の下、そこにあおむけに寝ころがって、木もれ日の影をからだじゅうに落として、頭を背の高い草にうずめたあたしの上に、彼が覆いかぶさってるの。あたしは草に埋もれるみたいにあおむけに寝て、上には大きな木があって、沈黙の歌が聞こえてて、からだは満ちているのに満ちていなかった。彼が三人いればいいのにって思ったわ、あたし、あの日の午後。彼が三倍になればいい、って。そこらじゅうに彼がいてほしかったの。

誰かが水路の土手の草を焼き払ってて、梢があたしの頭の上をすべるように過ぎていって、三人でその道を歩きながら、あたしは考えてるの、これはあたしたちについてのあたしの記憶なのよ、あなたとラフとあたしの、って。でも、あたしにはちゃんとわかってるの、こういうのはみんな消えていっちゃうんだってことが。煙も、いまにもやってこようとしている夜も、あたしたちが横になってるこの草、あたしたちが起き上がると一緒に起き上がってくるこの草も。あたしがあなたたちの顔を見て、燃える草のにおいがして、そしてあたしは考えるの、これはあたしたちについてのあたしの記憶なんだ、って」

だが、そこには燃える水路の土手はなく、ラフもおらず、夜の帳(とばり)が降りてはいたが、ぼくたちの目には地平線の向こうに沈む夕陽は見えていなかった。ぼくたちがいたのはぼくの家、四角い石造りの一階半建ての倉庫——灰色の木の床、崩れかけた天井、そして煉瓦の壁から突き出た切断された給排水管。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

その二、三時間前、ぼくは食料品をぎっしり詰め込んだ紙袋を抱えてすり切れた階段を上がり、屋根のこけむしたキューポラから差し込む光の中に入ってドアを開けた。すると、そこに彼女がいた。ベッドの端にうずくまるように腰を下ろして脚を組み、片手に煙草の吸い殻を入れたコーヒー・カップの受け皿を、もう片手に煙草を持って坐っていた。ぼくは戸口で足を止め、妹のリサを見つめた。ずっと向こうの、部屋の反対側の端っこ、ぼくから二十メートル近くも離れたところにいる妹を。そして、思った、ああ、何て小さいんだ、彼女は、と。

ぼくたち――妹とぼくは、ときには、しばらくのあいだまったく顔を合わせないことがある。そのあとで顔を合わせるときには必ず、二人が、少しばかりぎごちなく、肩をすくめて互いの名を呼び、どうしてる？　元気そうじゃない、ちょっと太ったね、といいながら手を差し出しそうになる、あの一瞬が訪れる。それはこの夜も同じだった。ぼくは妹に近づき、妹は跳ねるように立ち上がって煙草の灰を払い、蚊でも追いやるように顔にかかった髪を払いのけた。ぼくらは向かい合うかたちで足を止め、視線を交わし、うなずき合った。やがて、妹がそばに来てぼくの頬にキスをし、いったいどこに行ってたのよと尋ね、ぼくがそれに答えようとしたちょうどそのとき、ジャケットをソファに放り出して部屋の中を片づけはじめた。ぼくは肩をすくめてキッチンに入り、窓を開けて袋の中のものを取り出し、夕食の準備にかかった。

リサはぼくの双子の妹。家族の良心だ。一週間おきに、彼女とぼくの兄のラフが、ぼくのところにやって来る。ぼくらは飲み、食い、過去のことを話し合う。両親がまだ生きていたころのことを。そして、ラフとぼくはリサの話に耳を傾ける。ぼくらの過去にかけては、リサはオーソリティなのだ。以前のぼくは、彼女の話すことは何もかもでっち上げではないか、と思っていた。それほどまでに彼

女の記憶が細部にわたっているからだ。だが、その話のほとんどがラフの追認できるものだから（ラフはぼくらの二歳上）、いまはぼくも彼女の話はどれひとつとってもでっち上げではない、と確信している。「ぼく、そんなことしたの？」と、彼女がぼくにはなじみのない記憶を持ち出すたびに、ぼくは尋ねる。すると、彼女がうなずいて、そうよ、ほんとにしたのよ、と答え、ぼくたちと一緒に声をたてて笑う。ラフとぼくが本棚によじ登り、チンパンジーの真似をして、そのうちに本棚もろとも床に倒れたときのこと、バスルームに鍵をかけて自分のことを締め出したぼくの鼻に、彼女がパンチを食らわせたときのことなどを話して、三人で笑う。リサのする『すべてを忘れた男』の話――母に何度も聞かされて、しまいにその内容を一言一句残らず憶えてしまった物語に、聞き入る。ぼくらはその話をすっかり憶え込んでいたから、ときにはリサの間違いを正すことさえあった。違う、違うよ、そうじゃない、男はまず市場の物売りのところに行って、そのあと金持ちのところに行くんだよ、と。ぼくらは真夜中まで耳を傾ける。やがて、三人は沈黙に落ち込む。その後、話はぼくらの人生の十二年目と十四年目、家に帰る途中で両親の車が立ち木にぶつかった年にたどり着く。リサの訪問は、いつもぼくらがテーブルに坐り、蠟燭の火に照らされた壁に三つの影が踊るところで、終幕を迎える。「ちくしょう、リサ、二人が恋しいよ」とぼくがいい、ラフがうなずく。ドラマティックに。「わたしもよ」とリサがいう。「わたしもよ」と。そして、テーブル越しに手を伸ばし、ぼくらの手を握り締め、そのまま長いことじっとしている。頭を垂れて。ラフやぼくと同じように。降霊術に失敗した、三人の嘆きの心霊現象信者。午前一時、リサは帰ってゆく。シモンのもとへ、夫のもとへ。ラフとぼくは戸口に、伸び放題の緑の中に、蚊とくぐもった街の音に満ちた夜の中に立ち、いつまでもいつまでも手を振っている。これが最後の別れだとでもいうように、彼女もまた立ち木に激突しようとして

いるとでもいうように。一時間後、最後の一杯を飲み、最後の一服をしたラフが帰ってしまうと、ぼくは瓶入りのビールを手に自分の部屋のテーブルに戻り、リサのいったことに思いをめぐらせる。絶対に忘れてはいけないと思うことどもに。

しかし、このときにはことはそういうふうには進まなかった。ぼくたちはぼくの家の奥にある大きな窓の前に置いたテーブルをはさんで腰を下ろし、ぼくのつくったオムレツを食べ、ビールを飲み、リサは、ぼくが夕飯の支度をしているあいだに、煙草のように巻いたハシシをたて続けに吸った。彼女がいつもの話をはじめた。せめていつものように降霊術くらいしてみる義務がある、とでもいうように。しかし、それも長くは続かず、彼女の話は支離滅裂で真実味を欠いていた。

あの夏がそれほど暑かったこと、ぼくらの母が史上最大のおなかを抱えて祖母の地下室に坐っていたこと——そんなことを彼女はどうして知っていたのだろう。スプートニク打ち上げ、その部分は間違いではなかった。そこまではぼくも知っていた。ただし、そこからあとはついてゆけなかった。ぼくたちは、ラフ抜きで、古きよき日についての古きよき話と思える思い出話もせずに、坐っていた。テーブルにはまだ食器が散らかったまま。ときおり、リサが皿に押しつける茶色いしみのついたハシシの、熱い灰が消えるじゅっという音が聞こえた。やがて、オムレツの黄色と緑のかけらのあいだにつぶれた吸い殻がたまり、皿の上に惑星の模型の荒涼たる表面を思わせる情景が出現した。そのあいだじゅう、ぼくの脳裏には、ゆらゆらと遠ざかる彼女の姿が浮かび、彼女のいうことがますますわからなくなっていた。

リサが紅茶に口をつけた。指のあいだに、へたな巻き方をしたハシシがぶら下がっていた。彼女がそれを口に持ってゆき、ぐっと吸い込み、煙を肺にためたまま、刺すような目でぼくを見つめた。大

きな褐色のその目は充血し、赤褐色の髪が乱れたカールとなって額に張りついていた。
「リサ？」
ぷかりと煙がもれた。リサが人差し指を口に当てた。
「初めてのときは夏だった」と彼女がいった。「夏の盛り。あたし、青い亜麻のスカートにレースの縁どりのある白いブラウスを着て、黄色のカーディガンをはおってた。ウェイトレスをしてたの。あたしが彼の耳にキスをしたら、耳は人間の胎児のかたちをしてるんだよ、って彼がいったわ。そのあと、あたしは耳の中に彼の舌を感じて、下腹部が満ちるのを感じた。何もかも忘れよう、何もかも、これ以上考えないでおこう、何も、何もかも忘れよう、としか考えられなかったわ、そのときは。彼がそこにいて、彼の片手があたしの胸にあって、唇があたしの喉に押しつけられてて。あたしは彼の背中のくぼみをさわってた。背中がお尻に変わるところ、そう、そこを。彼のからだが温かくて、だから、あたしはいったの、いいわ、って。そしたら彼、あたしの手の中で大きくなって、あたしの手に預けたままで大きくなって。あたしが脚を開くと、彼がそこに割って入った。あたしの頭がぐるぐる回った。耳に入ってきた彼の舌、喉と乳房に押しつけられた彼の唇。いいわ、ってあたしはいった、いいわ、って。彼を感じて、感じなくて、また感じて。彼はけものので、彼の唇があたしの乳房のあいだから下腹部へ、腿へと下りていって、なんだか海で泳いでいるみたいだった。あふれ出しそうな感じだった。いろんなものが見えたわ、家、部屋、森、牧場、馬の死骸。彼がそこにいて、あたしはからだの中に彼を感じて、そしていったの、いまそれが欲しい、あなたが欲しい、って。そのあと、二人で自転車に乗って町に行ったの。あたしをうしろに乗せて、自転車はそのまま森を抜けたのよ。あたし、ハミングしながら考えてた、どうしてみんな初めてのときはよくないっていうんだろう、最高

だったのに、って。空気はスイカズラのにおいだった」

彼女の目は依然としてぼくに注がれていた。何かを、ぼくの知らない何かを、ぼくがその正体を知りたいと思っているのかどうかわからない何かを、見ているような目だった。だが、彼女はたしかに何かを見ていた。

「みんなである家にいる夢を見たわ」と彼女がいった。「あなたとラフとパパとママとあたしで。そこらじゅうのドアが開いてるの。ものすごい風が吹いて、窓ががたがた鳴ってるの。夜、その家のいろんな部屋をいろんな人が歩いてる夢を見たの。ある日の朝、あなたとあたしが地下室にいるの。あなたはあたしの横にいて、二人でくすぶりながら燃える薪の煙の中を歩いてるの。ふと横を向くと、あなたの顔が煙の中で見え隠れしてる。あたしたち、その煙の中を帆船がすべるみたいに通って廊下に出るの。あなたが顔を斜め上に向けてからこちらに向いたわ。首をぐっとうしろにそらして、目をぎゅっとつぶって。そして、何かいいたそうな顔をしてるの。あたしに声をかけたそうにして。だけど、あたしのことが見えなくて、あたしの声も聞こえないの。そのうちに、ものすごくゆっくりと、あなたの口が開いた。顔の真ん中で口が開いて、その穴がどんどん大きくなって、おしまいにその穴の中に顔が消えてっちゃった。あなたの写真があるわ、おじいちゃんとおばあちゃんの家で、おばあちゃんの脚のあいだに立ってる写真。あなたは一歩前に踏み出そうとしてるの。でも、まだほんとうは歩けなくて、小さな手でお庭の門にしがみついてるの。おばあちゃんがそんなあなたを脚のあいだにはさんで、両手で肩を押さえてるの。おばあちゃんがあなたを心から愛してたことがよくわかる写真よ。おじいちゃんは見えないわ。もう一枚、おじいちゃんの写真もあるのよ。あたしをおぶってにこにこしてる写真。その二枚を見ると、あたし、二つのことを考えるの。ひとつは、みんないなくな

っちゃった、ということ。そこがあたしにはなかなか理解できないところなの。いなくなっちゃうなんて、考えられない。どうして、何もかもすっと消えちゃうの？　命、写真に残ったイメージ、みんなが感じたり考えたりしたことのすべてが。ありえないことでしょ。もうひとつは、ママから聞いたおじいちゃんが死んだときのこと。おじいちゃんの死が迫ってたとき、ママがベッドサイドに立ってたら、おじいちゃんがいったんですって、いちばんつらいのは、この虫だよって。だから、ママがいったんだって、虫？　って。そしたら、おじいちゃんがまたいうんだって、床一面、虫だらけだって。そして、こうつけ加えたんですって、ほんとに虫がいるわけじゃないのはわかってる、それはわかってるさ、けどなあ、やっぱりいるような気がするんだよ、って。人間って、あんなふうにして死ななきゃならないの、サム？　意識が朦朧（もうろう）として、うわごとをいって、虫だらけの床に置いたベッドで？　二枚の写真を見ると、あたしはどうしても死のことを考えちゃうの。あんよができるようになりかけの男の子がおばあちゃんの脚のあいだに立ってる写真と、おじいちゃんにおぶさってる女の子の写真だってことはわかってるのに」

リサの目がぼくの顔の上をさまよった。ぼくは思った、ぼくが動きさえしなければ、彼女はもっとよくぼくの顔を見られる、と。ぼくはマネキンのようにテーブルの前に坐っていた。

「いまは夜で、腰を下ろして絵を描きながら音楽を聴いてるみたいな気がする。ラジオのダイヤルは、二つの局のあいだで止まってるわ。あなたの声が聞こえたり聞こえなくなったり。だから、あたしはあなたを捜すの。どこにいるのか、あたしにはわからない。ときどきあなたをつかまえるの。遠くであなたの声がするのよ、雑音の中でささやく声が。リサ、ってあなたがいうの、リサ、って。だから、あたしもいうの、みんなが恋しい、ものすごく、って。ぼくもだよ、ってあなたがいって、あたした

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c